

## 随 想

## 回 想 と 希 望

安 藤 卓 雄\*



国電のプラットホームで、なにげなく古レール利用の柱を見やると、“Carnegie Steel 1919”と刻印されてあつた。すなわち、このレールは私の生れた年に米国でつくられ、日本に輸入されて多年にわたり国鉄の幹線などに使用された後、第2の使命に老後をささげているのである。かつて戦時中に、私たちが新米の実習技術士官としてたむろした、呉海軍工廠製鋼部3階の骨組みも、Bethlehem Steel 製の鋼材であつたことが、急に脳裏によみがえつた。

1919年には、日本の鋼材生産は46万9千tで、しかも自給率はわずか43.5%と記録せられている。その後昭和初頭にかけて、日本鉄鋼業は欧州鋼材、インド銑などの安値輸入におびやかされつつも、合理化に取り組んで生長を続け、鋼材の生産も100万tを超えるに至つた。しかし国の輸出入バランスは常に赤字であり、重化学工業の整備はなおスロー・ペースで、街路を走る自動車は、日本で組み立てたフォード（市価2000円、すなわち\$1000くらいであつたろう）をはじめとする外車ばかりであつた。

1970年代のわが国の若い鉄鋼人諸兄には、このような有様は、想像することさえむずかしいであろう。

2度の世界経済恐慌と、関東大震災による破壊とに見舞われた、この第1次大戦後の10年はしかし日本の鉄鋼業界が興隆する直前のincubation periodであつた。輸入防遏と市場安定のためにとられた、一連の賢明な施策に加えて、俵先生、本多先生らのご指導の下に育つた数多くのすぐれた技術者が鉄鋼界に身を投じ、研究・生産の両面に成果をあげながら、またさらに若い後進たちを育成しはじめたからである。次いで1930年代に入ると、わが国の鉄鋼業はさらに近代化のあゆみをすすめ、また三島先生のご研究にかかるMK磁石鋼が、全世界に名声をあげるなどの、めざましい学術的収穫が得られて、今日の基礎がようやく固められた感がある。

1940年代の初期に学窓を出た私にとって、毎月の『鉄と鋼』や金属学会誌に発表せられる鉄鋼材料の諸研究は、まことにありがたい第2の師であつた。また私は幸いにも研究実験の部に配属されたので、老練、新鋭の諸先輩の教導を受けるとともに、国内の特殊鋼メーカー数社と海軍との、特殊鋼材共同研究会の記録を勉強することができた。第一線の研究者各位が、共同のテーマに対して、それぞれの本領を発揮しつつ、協力して探究を進めている姿は、若い私にとって、まさに驚異そのものであり、百冊の教科書にもまさる尊い教えを授けられた。出張の途次などに、論文でお名前だけ知っていた諸先輩をたずねると、旧知のごとく受け入れられて、種々の貴重な実験データを示して下さつた。すでに学振に参加して活躍しておられる部内の先輩は、製鋼の物理化学研究の現状を説明された。このような後進教導は、もちろん全国すべての鉄鋼プラントで活潑に実施され、ベテラン、中堅の相互研鑽も、これに劣らずさかんであつた。いうなれば、日本鉄鋼業の発展を目的とした情報化コミュニティの原型が、すでに確立せられており、そのセンターとして鉄鋼協会が存在していたのである。その雰囲気はまことに楽しく活気にあふれ、戦争激化による暗いムードをも忘却させた。この活気が、戦災にひきつづく敗戦による壊滅から、日本鉄鋼業が不死鳥のように復活した原因のひとつであつたことは、疑うべくもない。

戦後の4半世紀における日本鉄鋼業の成長は、まさに名馬が達人の騎乗によって疾走するようであつた。

\* 東洋鋼板(株)技術部部長 工博

た。この間において、鉄鋼協会をはじめ関連諸学会の会誌ならびに講演会が、技術の研讃と情報の伝達とに大きな成果をあげたことはもちろんであるが、これとならんで鉄鋼技術共同研究会の各部会の功績はまことに偉大であり、これを全世界に誇つてもよいものと信ずる。さらに 1963 年本協会に設置せられた研究委員会は、研究のシステムをデザインし、基礎・応用プロジェクト研究のテーマを選定するなどユニークな活動を続けている。

システムがいかに完備されていても、これを運用して価値あるものを創造するのは人間である。日本鉄鋼業の前途を考えると、技術導入型から脱して、みずからあまたの新技术を産み出すべきだ、とは諸賢がすでに力説されている。日本人の創造力については、いろいろの見解もあるが、素質的には十分であり、いまや大いに発揮されようとしているものと考え。一国民の創造的能力は、天の時と地の利がマッチし強い使命感が国民すべてにみなぎるとき、はじめて高揚されるのであつて、産業革命時の英国がその好例である。いま世界の鉄鋼業に課せられたテーマは、第一に原料、エネルギー、労働力、公害などの諸問題を克服する新しい製鉄・製鋼プロセスの開発であり、第二には高度化・多様化する諸ユーザーの要請にこたえて、高性能の優秀鉄鋼材料を使いやすい価格で供給することである。戦後の躍進を可能ならしめたわが鉄鋼技術陣のバイタリティは、各国と秩序ある連繫を保ちつつ、これらの問題を解決して新しいプロセス、有用な新製品を産み出すのに十分であろう。

創造をなしとげるには、正しい目標の選定と、効率のよい研究・開発システムの樹立に加えて、関係者全員のなみなみならぬ努力の結集が必要である。幸いに、わが鉄鋼界には、各分野の若い優秀な人材が、なお続々と参加してきており、田畑専務理事がいわれるように、欧米諸国の鉄鋼業界よりも、この点ではるかに恵まれている。われわれはこの若い才能を暖く迎え、わが鉄鋼技術界の伝統である懇切・広範な指導育成により、彼らの創造性と活動力をひき出し、相携えて至高の目標にむかって前進をつづけなければならない。このためにも本協会が中心となつて学業を終えた後の継続的教育について、万全の方策を検討されることがのぞましい。また好ましい環境は与えられるものでなく、みずから造りだすべきものであるから、若い研究者・技術者諸兄は、進んで講演会、共同研究会に参加して、~~『~~ややともすれば老化しがちなコミュニティの雰囲気、活力を注入していただきたい。昨秋から本協会の講演大会において催されているジュニア・パーティなどは、この機運を盛りあげるための絶好の場であろう。かくして、使命を終えた従来のルールに代えて、高性能のルールにより新システムの路線をひらき、鉄鋼新技术創造のための特急列車を走らせたいものである。